

授業概要

英語の様々な言語現象について、大人の文法に基づいてたてた規則・原理を探っていく Chomsky の生成文法の結果説に基づく研究成果を整理し、子供の言語習得のプロセスを律する動的な法則を探究する Kajita の動的文法論に基づいた実証的な研究の観点から見直し、さらに生成文法では周延的であるとして退けられ、見逃されがちな新たなデータを発掘するという観点から有意義な研究成果を概観していく。イントロも兼ねて Jim Miller (2011) *A Critical Introduction to Syntax*, Continuum.に基づいて、そこで示されたデータが動的文法論から見るとどのように分析できるかという観点から講義を行う。

授業計画

第 1 回	Introduction
第 2 回	Theory, Data and Analysis
第 3 回	Dependency Relations (1)
第 4 回	Dependency Relations (2)
第 5 回	Noun Phrase and Non-configurationality
第 6 回	Constructions
第 7 回	Grammaticality
第 8 回	A Dynamic Model of Syntax
第 9 回	Grammar and Semantics: wh words
第10回	Grammar and Semantics: Parts of Speech
第11回	Grammar and Semantics: Thematic Roles (1)
第12回	Grammar and Semantics: Thematic Roles (2)
第13回	Language Complexity
第14回	First Language Acquisition
第15回	Summary and Residual Problems for Future Studies
第16回	筆記試験

到達目標

人間のこころ／脳に収められた内部言語(としての英語)を自然科学の方法論を用いて原理的に説明するというとはどういうことかということを具体的な構文について書かれた研究論文を輪読しながら体得することを目指す。次の様な米国の小説の一節の統語構造とその特徴をまず自分で発見できることが理想だが。Look: Wire out HIS window. Into HIS hedge, out, under the stones. (James Ellroy, 1992. *White Jazz*, p.138) 文学鑑賞ではないので注意。この世に存在しない人物の心情をあれこれ考えてみても仕方がない。別の研究分野だから。もちろん意味構造(の表示をどのよう仮定し、それ)との対応がどうなっているか考えることは十分意義がある。

履修上の注意

講義中はきちんとノートをとること。学生に英語で書かれた文献を声に出して読んでもらったあと日本語で説明・解説を加える。予備知識は必要としない。わかりやすく丁寧に説明するつもりである。歓迎・質問・議論。

予習復習

配布された印刷教材をした読みして、疑問点、問題点についてあらかじめ整理しておくことが望ましい。また、授業後、ノートや教材を読み返し、内容を整理しておくことが望まれる。

評価方法

予習・復習の有無、随時行うまとめの提出などを授業態度として筆記による定期試験の結果と合わせて評価する。学期末試験 70%、提出物 15%、授業態度 15%

テキスト

プリント教材を使用する。参考文献については適宜言及。

参考文献: Jim Miller (2011) *A Critical Introduction to Syntax*, Continuum.

Masaru Kajita (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics* 5, pp. 44-76. James D. McCawley (1988), *The Syntactic Phenomena of English*, Chicago Univ. Press.